

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

2013 年度先端社会研究所共同研究プロジェクト

指定研究プロジェクトの進捗状況報告

関西学院大学先端社会研究所では、「アジアにおける公共社会論の構想」を基本理念として研究活動を展開している。2012 年度から三つの相補的プロジェクトとして「日本班」、「南アジア／インド班」、「中国国境域／雲南班」を定め、それぞれ個別の地域において共同研究を実施して、「包摂」と「排除」の二元論を超える社会調査に取り組んできた。以下、各プロジェクトの進捗状況報告を掲載する。なお、報告は 2014 年度 2 月時点のものである。

◆ 「南アジア／インド班」プロジェクト

代表：関根 康正（関西学院大学社会学部教授）

南アジア／インド班は、現代南アジア社会および南アジア系移民社会における「排除」と「包摂」をめぐる複雑な界面を、フィールドワークと文献に基づき実証的かつ理論的に考察する作業を継続している。班員のこれまでのフィールドワークは、インド、スリランカ、ネパール、イギリス、アメリカで展開されており、今年度は 3 回の海外フィールドワークが実施された。班主催の定期研究会は、2013 年 6 月と 2014 年 1 月の計 2 回開催された。いずれの報告も昨年度から継続している一連の研究会の議論と有機的に関連しながら展開されており、詳細な個別事例から報告者によって提示されるパースペクティブに至るまで、南アジア／インド班のプロジェクトにとって大きな示唆を与えるものとなっている。（なお以下の報告は 2014 年 1 月末現在のものである）。

〈班員によるフィールドワーク〉

鳥羽美鈴（期間：2013 年 7 月 22 日～8 月 4 日、調査地：アメリカ・マイアミ）

関根康正（期間：2013 年 7 月 28 日～9 月 2 日、調査地：イギリス・ロンドン）

鈴木晋介（期間：2013 年 11 月 9 日～25 日、調査地：スリランカ・キャンディ）

鳥羽はマイアミ大学での資料収集やインド系移民を対象とした聞き取り調査を実施、関根は昨年来継続している、英国における南アジア系移民の生活実践にみる「排除」と「包摂」に関する事例収集を行った。また、鈴木（晋）は昨年度の継続調査としてスリランカの宗教現象をめぐる「排除」と「包摂」をテーマに「願掛け儀礼」と「仏堂建造ムーブメント」に焦点を当てた民族誌的データ収集を実施した。なお上記の海外研究調査活動のうち、鳥羽による調査研究の成果の一部は、研究ノートの形で本紀要に掲載を行っている（「インド系英語作家にみる排除と包摂－ジュンパ・ラヒリを事例に－」）。

〈班主催定期研究会〉

第 4 回「舞台の上の難民－芸能集団の実践から見るチベット難民社会の排除と包摂」

講師・山本達也氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、日本学術振興会特別研究員 PD）、司会・鈴木慎一郎、2013 年 6 月 21 日（金）、於：先端社会研究所セミナールーム

第 5 回「英国におけるパキスタン系コミュニティの変容－第二世代の女性たちによるエスニック境界の交渉に着目して」

講師・工藤正子氏（京都女子大学現代社会学部准教授）、司会・鈴木晋介、2014 年 1 月 24 日（金）於：先端社会研究所セミナールーム

本年度は外部から講師を招聘し、上記 2 回の班主催定期研究会を実施した。第 4 回の山本氏の報告では、北インドヒマチャル・プラデーシュ州ダラムサラを拠点とするチベット亡命政府運営の芸能集団 Tibetan Institute of Performing Arts（TIPA）の活動の詳細な報告とともに、1959 年以来醸成されてきたナショナリズムが孕む排除と包摂をめぐる現状の分析がなされた。チベットをめぐる問題やナショナリズムは、西洋やインドの提示する政治的理念や経済的援助と大きく関わっており、常にグローバルな関係性のなかで形成されてきた。だが、近年の難民社会の構造変化や難民 3 世が社会の中心となってくる中で、難民社会内外のまなざしに貫かれたナショナリズムが抱えている排除と包摂をめぐる問題が浮上してくる。報告では、チベット文化やアイデンティティの重要性を説きながらインド国内外で公演する TIPA の活動と、難民社会のナショナリズムをめぐる参加者との間で議論が交わされた。

第 5 回の工藤氏の報告では、第二次世界大戦後の英国に旧植民地出身の労働移民として流入したパキスタン系移民に関する報告がなされた。とくに在英パキスタン系移民の第二世代の女性たちが、家族やエスニック・コミュニティ、主流社会という重層的な空間を生きるなかで自らの帰属といかに交渉し新たなアイデンティティを紡いでいるかが考察の焦点となった。彼女たちは教育レベルでは第一世代から大きく前進し、一定の職業的地位を獲得した者も多いが、主流社会での地位の獲得が、男女隔離や女性のケア役割と結びつけられた移民社会内の女性性の理念と矛盾するために、結婚市場で周縁化される傾向もみられる。報告では、工藤氏の詳細なフィールドワーク経験と豊富な語りの資料、映像資料が提示され、包摂と排除の力が複雑に入り組む第二世代の女性たちの帰属をめぐる交渉について、そしてその過程から新たな共同性が切り拓かれる可能性（とくにコミュニティ・ワークやヒンドゥー儀礼を用いたムスリムとヒンドゥーの社会的紐帯の形成）を巡って活発な議論がなされた。

〈定期研究会報告の紀要掲載開始〉

南アジア／インド班では、昨年度（2012 年度）定期研究会の報告や質疑の内容を本紀要読者と幅広く共有することを目的として、本紀要より「特集」の形で報告記録の掲載を開始した。第 1 回は、2012 年 11 月に開催された若松邦弘氏による報告の模様である。他の報告についても順次掲載を進めていく予定である。

◆「中国国境域／雲南班」プロジェクト

代表：荻野 昌弘（関西学院大学社会学部教授）

「中国国境域／雲南班」は、中国国境域に位置する雲南省の多民族社会において、市場経済の浸透に伴う少数民族の文化的変容と民族間関係の変化に見られる「排除」と「包摂」をめぐる実証研究に取り組んでいる。班による2013年度の研究活動は、主に国際会議への参加、2013年8月の現地調査、学術助成金の申請、2014年3月の現地調査予定など四点に集約することができ、いずれも班のプロジェクトを進めるうえ重要な意義を持っている。

〈学会参加報告〉

2013年8月21-22日に中国昆明で開催された国際会議「International Conference on the Anthropology of Disaster and Disaster Mitigation and Prevention Studies」への参加である。

本国際会議には、「中国国境域／雲南」班の代表である荻野昌弘と村島健司、濱田武士など3名が参加報告を行った。荻野昌弘は、基調講演において“Towards a Comparative Sociology of Disaster”というテーマで、災害がいかにして社会学の重要な研究対象となるのかについて論じた。議論は、社会学が災害研究において対象とするべきものとして「潜在的な災害リスク」と「災害がもたらす社会変動」の二つの側面を提示し、この二点について、雲南省新平県の土石流災害、阪神淡路大震災、東日本大震災についてそれぞれ考察し、「社会的老い」、「死の物象化」、「忘却から記憶」といった観点から、現代社会における災害の意味について比較社会的な分析を行った。次に、社会学研究院研究員の濱田武士は、荻野が司会を務める部会“Overseas Anthropological Studies of Disaster”において、“A process of becoming cultural heritage and succeeding memories”と題し、1990年代以降の広島原爆ドームの世界遺産化のプロセスに焦点を当て、文化遺産と記憶の継承について考察した。さらに、社会学研究科研究員の村島健司は、「灾后重建与宗教觀念」（災害復興と宗教觀念）という部会において、「宗教團體の災害重建活動與其正當性－以台灣佛教慈善團體投入的兩種災害重建為例」というテーマで、台湾の宗教団体による災害復興への取り組みについて報告を行った。このような発表は、本国際会議における「災害人類学の新たな展開や研究成果を振り返り、災害研究における理論と方法を改めて探究する」ことに大きな示唆を与える内容であった。

〈現地調査報告と成果発表〉

2013年8月23-29日まで行った昆明と新平イ族タイ族自治県の「県城」（県政府所在地）における現地調査である。参加者は、荻野昌弘など5名の班員と雲南省社会科学院の李永祥である。

「県城」は、新平県の政治、経済、文化、情報の中心地として、中国の経済発展による都市化のなかで1990年代を境に目覚ましい変化を遂げてきた。このような「県城」の調査は、大きく三つの点から進めてきた。一点目は、1990年代以前までの「県城」の文化形成が、主に漢族文化と回族文化を中心に構成されていることに対する考察である。二点目は、都市化の中で消失の危機にある漢族文化と回族文化に対する文化財保護の取り組みを取りである。主に「古城老街」、「清真寺」、「龍泉寺」、「桂山大廟」などを対象にした調査である。三点目は、1990年代以降に急速に形

成されている新しい文化と表象である。「民族広場」や「新平大道」などを対象にして文化表象が、イ族文化を中心にしている現状である。この現地調査に基づいて、現在班員による共同執筆が行われている。また、この研究成果は、「辺境から問うグローバリゼーション——中国雲南省新平県の「県城」から見る世界（1）」として『先端社会研究所紀要』に掲載する予定である。

〈学術助成金の申請〉

班による取り組みの一つとして「平成26年度（第39回）学術研究振興資金（日本私立学校振興・共済事業団）」（代表：荻野昌弘）と「平成26年度科学研究費助成（基盤C）」（代表：林梅）の申請を行った。

申請は、「中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究」をテーマに次のような内容を研究目的に据えていた。具体的には、「今日における中国社会の経済発展は、都市部だけでなく、国家権力が長い間実質的に及ぶことのなかった内陸部の辺境地域にまで及んでいる。こうした地域は歴史的に、複数の少数民族がそれぞれの伝統や文化を継承しながら、共存してきた。本研究では、中国辺境地域が、市場経済や国家による開発に組み込まれる過程で、画一的な文化の受容を通して地域社会を変容させながらも、少数民族独自の伝統や文化をどのように継承しているのかを明らかにする。また、そこから、文化的多様性や多民族共生のあるべき方向を明確にするための知見を提供していきたい」というものである。

続く「平成26年度科学研究費助成（基盤C）」の申請は、上記の内容をさらに発展させたものとして、次のような特色および意義を見出していた。まず、中国少数民族に対する、人類学を中心とした先行研究では、それぞれの民族に関する個別の事例が中心である。それに対して本研究は、市場経済や国家による開発の過程で生じる、漢族を含めた各民族間の接触や関係性の変化に注目し、それぞれが共生する中で変容する地域社会の姿を問うところに独創的な点がある。その際、従来の研究対象の最小単位である「民族」をも脱構築し、民族名を確定するために中華人民共和国が実施した、近代化の産物としての「民族識別工作」以前の集団である「支系」にまでさかのぼり、さまざまな支系が、国家によって各少数民族へとまとめられていく過程についても明らかにする。次に、調査地である雲南省は、中国はもちろん、アジアでも最も多くの少数民族が共生している典型的な地域であり、長く国家権力の及ばない辺境地域として位置づけられてきた。現在の社会学において、近代社会の変容を捉えるとき、主に欧米の社会だけをモデルとして、「ポスト近代」や「後期近代」を唱えることが大きな流れとなっている。しかしながら、国家を超えたさまざまな位相における交流と移動が頻繁になった今日、欧米の近代国家を前提とした従来の社会学理論は限界を迎えつつあると考えることができる。それに対して本研究では、国家が自明のものではなく、社会を律するうえで最も重要な単位が別に存在した辺境地域に注目し、元来、外部からの影響を最小限にとどめることで成り立ってきた社会が、どのような変化を遂げるのかを明らかにする。つまり、こうした地域における各民族の文化継承の事例を通して、近代国家の存在を前提とする欧米を中心とした社会学理論を批判的に捉え、アジアを踏まえた多民族共生や多文化社会に関する、独創的で新たな社会学理論を構築することになるだろうという見込みである。このような研究意義は、先端社会研究所が掲げている「排除」と「包摂」の二元論を超える社会調査に対しても大きな示唆を与え

るものである。

さらに、研究助成の申請自体が、先端社会研究所共同研究プロジェクトの継続的發展に重要な意義をもたらすだけでなく、班員による研究主旨の一体化を図るうえでも重要な役割を果たしているのである。

〈3月の現地調査予定〉

2014年3月4-10日まで行う予定の昆明と新平イ族タイ族自治県の県城における現地調査である。新平イ族タイ族自治県の「県城」に続く調査として、戛洒鎮の戛洒街を対象にするものである。

戛洒鎮は、「県城」に所在地を持っている県行政機関の管轄下にある4つの鎮の一つとして、「県城」から西に約70km離れている。戛洒街にはタイ族、イ族、ハニ族、漢族など12の民族が居住しており、省の主要道路である218号線が必ず通らねばならない道として、貿易の拠点でもある。今回は、この戛洒街を中心にした周辺地域への調査を予定しており、基本的には「県城」調査と同じく、1990年代を前後にして都市化が急速に進むなかで、想定される街の文化変容を取り上げることを企画している。加えて、2013年8月の「県城」の補足調査も予定している。

戛洒の街の調査結果は、「辺境から問うグローバリゼーション——中国雲南省新平県の戛洒街から見る世界(2)」として『先端社会研究所紀要』への2回目の掲載を想定している。

このように本年度において研究班は、研究調査とともに国際学会での研究発表や国内における論文発表などと成果発表を意識した取り組みを行い、さらに持続的な研究のための資金獲得にも努めてきたのである。

◆「日本班」プロジェクト

代表：島村 恭則（関西学院大学社会学部教授）

日本班の目的は、アジアを中心とした諸外国や日本列島の周縁地域出身の人々が、その出自にともなう文化やネットワークを資源として、価値転換をおこなうさまや、移動民の集住地域、新旧住民の混住地域における力関係の逆転などを捉えることにある。2013年度は、各自の質的調査および文献資料調査を積み重ねていき、従来の「排除／包摂」といった二項対立的な枠組みからは抜け落ちてきた諸現象や人々の実践領域を明らかにしていくうえでの共同研究の基盤を構築することを目指した。その進捗状況および成果に関しては、日本班研究会を通じてメンバー間で共有するとともに学内外に発信された。以下が、各自の進捗状況およびその成果が報告された著書、論文、口頭発表等と研究会およびシンポジウムの概要（今年度の予定含む）となる。

〈進捗状況〉

島村恭則：①広島市中区元安川のかき船2艘を対象に、戦後復興・都市開発と河川占用、移動に関する実態調査を実施した。②広島市中区基町アパートにおいて清掃員ガタロ氏（self-taught art-

ist) よりライフヒストリーを聴取した。③富山市において戦後復興期の人の移動と闇市の消長に関する実態調査を実施した。④長野県松本市・上田市・下伊那郡において満州引揚者をめぐる排除と包摂についての実態調査を実施した。⑤鹿児島県奄美市において阪神間への移住者と母村との間に形成されたネットワークに関する実態調査を実施した。以下がこの間の研究成果の報告となる。

〈著書〉

- ・ 島村恭則編著『引揚者の戦後』新曜社、2013年8月（編著）。
- ・ 島村恭則「フォークロア研究とライフストーリー」『語りが拓く地平－ライフストーリーの新展開－』山田富秋・好井裕明編、せりか書房、2013年10月（分担執筆）。

〈論文〉

- ・ 島村恭則「熊本・河原町『国際繊維街』の社会史－闇市から問屋街、そしてアートの街へ－」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第9号、2013年3月。

〈調査報告〉

- ・ 島村恭則・沼田愛「仮設住宅での聞き取りからみえてくる生業・土地利用・被災家屋－名取市北釜地区での調査から－」『無形民俗文化財が被災するということ－東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌－』、新泉社、2014年1月。

〈口頭発表〉

- ・ 島村恭則「フォークロア研究 (folkloristics) とは何か－『民俗学』を再定義する－」第65回日本民俗学会年会（10月13日、新潟大学）。

〈国際シンポジウム報告〉

- ・ 島村恭則「台湾におけるクレオール現象と日本統治」、日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム「世界のなかの日本 世界のなかの日本語」富山大学人文学部、2013年12月。

〈講演〉

- ・ 島村恭則「宮古島フォークロア研究の新しい視点－創造性とアイデンティティをめぐって－」、宮古島の神と森を考える会、沖縄県宮古島市、2013年11月。

金明秀：2013年度第1回日本班研究会にて、2012年度に実施した「日本のグローバル化と市民の政治参加に関する意識調査」のデータから、現代日本社会における排外主義の現状を考察に関する報告を行った。同調査は、3種類の都市（①外国人集住都市会議の会員都市、③宮城県石巻市、③西宮市）の選挙人名簿を母集団としたものである。従来の「排除／包摂」といった二項対立的な枠組みを乗り越えていくにあたり、まず現代日本社会における排除とは何かを明確にしていくことを試みた。また、“Les caractéristiques de la xénophobie au Japon”（日本における排外主義の特性）と題した論文がフランスの移民問題専門誌 *Hommes et migrations* 4～6月号に掲載された。なお、以下がこの間の研究成果の報告となる。

〈論文〉

- ・ Kim, Myungsoo, “Les caractéristiques de la xénophobie au Japon”, *Hommes et migrations*, avril-mai-juin, 2013.

〈口頭発表〉

- ・金明秀「現代日本社会における排外主義——日本のグローバル化と市民の政治参加に関する意識調査から」2013年度第2回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第1回、2013年7月。

山口寛：集団就職と呼ばれた大規模な労働力移動現象の実態を解明するため、資料収集を進めている。たとえば2013年8月には秋田県立図書館、秋田県労働局において資料収集をおこなった。すでに戦時体制下において広域職業紹介制度、集団赴任制度といった関連諸制度がかなりの程度整備されていたことが明らかになった。2013年10月には秋田県立図書館・秋田県立公文書館に改めて訪れ、資料収集をおこなうとともに、その内容を論文としてまとめて上梓した。これらの論文も含め、現在は集団就職に関するこれまでの成果をまとめる作業に入っている。それ以外には先祖調査ブームについて情報収集し、その一部をまとめた拙稿を本誌に寄稿した。その他、2016年発刊予定の『尼崎市新市史』へも2つの小論を寄稿した。以下がこの間の研究成果の報告となる。

〈著書〉

- ・『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房、2013年（共著）。
- ・『フィールドは問うー越境するアジアー』関西学院大学出版会、2013年（共著）。

〈論文〉

- ・「集団就職と韓国人研修生ー高度経済成長期における「開国」ー」寄せ場26、2013年。
- ・「戦時体制下の集団就職ー一九三九年秋田発「日本最初」の就職列車を中心にー」関西学院史学41、印刷中。
- ・「先祖との絆を創りだすー日本における先祖調査の展開ー」先端社会研究所紀要11、印刷中（共著）。
- ・「都市のダイナミズムと都市景観行政ー尼崎市の寺町都市美形成地区を中心にー」人文論究63-1、2013年。

〈事典〉

- ・「階層と空間」、人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版、2013年。
- ・「集団就職」、吉原和男編集代表、蘭 信三・伊豫谷登士翁・塩原良和・関根政美・山下晋司・吉原直樹編『人の移動事典ー日本からアジアへ・アジアから日本へー』丸善出版、2013年。

〈講演〉

- ・「集団就職と県人会ー高度経済成長期の若年労働力移動ー」労働政策研究・研修機構、2013年3月。

難波功士：日本映画（およびテレビドラマ）における在日コリアンの表象について、関連文献や該当作品を収集・閲覧する作業を継続中である。戦後長らく、啓蒙・啓発の文脈、もしくはアウトローものにしか表象の例を見なかったが、1992年のテレビドラマ「1970 ぼくたちの青春」、1993年の映画「月はどっちに出ている」あたりを契機に、一気に表現の多様化が進んできている。現

在、そうした流れと2000年代の韓流ないしK-POPブームとの関連を中心に調べている。

山泰幸：済州島出身の在日コリアンの社会的成功者の研究調査を継続して行っている。各種の伝記的資料の収集とともにインタビュー調査を実施した。2013年11月には、韓国で唯一の在日コリアン研究所である、青巖大学校在日コリアン研究所を訪問して資料収集を行った。また、済州大学校在日済州人センターおよび高麗大学校日本研究センター在日韓国人・在韓日本人研究室を訪問して資料収集を行った。以上、三か所の訪問をし、資料収集とともに研究ネットワークの構築を進めた。

川端浩平：非集住的な環境で生活する在日コリアンの帰属意識の変容に関するフィールド調査（岡山県岡山市、倉敷市）を引き続き実施した。以下がこの間の研究成果の報告となる。

〈著書〉

- ・『フィールドは問う——越境するアジア』関西学院大学出版会、2013年（共著）。
- ・『ジモトを歩く——身近な世界のエスノグラフィ』御茶の水書房、2013年（単著）。
- ・『〈ハーフ〉とは誰か——人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社、2014年（2月刊行予定）（共著）。

■日本班研究会

- ・2013年度第2回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第1回
報告者：金明秀（関西学院大学社会学部教授）
日時：2013年7月5日（木）15:00～18:00
場所：先端社会研究所セミナールーム
報告題目：「現代日本社会における排外主義——日本のグローバル化と市民の政治参加に関する意識調査から」
- ・2013年度第3回先端社会研究所定期研究会 共同研「日本班」研究会第2回
日時：2013年11月29日（金）15:00～18:00
場所：先端社会研究所セミナールーム
報告者：岡本雅享（福岡県立大学人間社会学部准教授）
題目：「出雲からみた日本のネーション・ビルディング」

なお、2014年3月1日（土）にシンポジウム『グローバリゼーションと他者問題——現代日本・韓国・オーストラリアの排外主義』を実施し、安田浩一（ジャーナリスト）、金明秀（本学社会学部教授）、塩原良和（慶應義塾大学法学部教授）に報告していただく予定である。